生きている理由

[使徒言行録 9章 1～16節]

さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」

[1] パウロ(サウロ)と私たち

「パウロなくしてキリスト教なし」と言われる程、パウロという存在は今を生きる信仰者の私たちにも多くのことを語る人物です。大伝道者にして、新約聖書に多くの書簡を残した神学者・思想家とも言えるでしょう。今日からご一緒に味わう使徒言行録に記されているパウロの、命の危険や迫害に晒されながらも、何度も海を渡り、周辺諸国にキリストの福音を届ける旅を続けたその生きざまというものは、口先だけではない迫力というものを感じないではいられません。

そのパウロの一以前は**サウロ**言っていましたが一伝道者としての出発点が今日の9章です。「**パウロの回心**」とか「**復活の主イエスと出会い**」とか言われていますが、私は今回ここを読んで、これ迄とはちょっと違う印象を持ちました。ちょっと前までは、このとてもドラマティックな回心劇は、いかにも大伝道者パウロの誕生に相応しいことだ、神様はどうしてもこの男を伝道者にしたくて、このような派手な、有無を言わせぬな方法で彼を捕まえたのだなと思っていました。そしてその意味では、パウロと私とは違う存在だ、私自身も神様に見出して頂いたと思っているけれど、やはりパウロは特別な人だ、私はちっぽけなクリスチャンに過ぎないと思っていました。けれども、そうなのでしょうか？ここでの**サウロの出来事と、私たちに起こった事**は、異質で区別されることなののでしょうか？そうではないのだと思ったのです。そのことをお話させて頂きたいと思います。

[2] 裁く人・サウロ

サウロは、9章の初めではキリスト教信徒たちを迫害する人物として描かれています。「さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった」(1-2)。この「大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた」というのがとても重要だと思います。彼は**公の裁き**として、キリスト者を弾圧したかったのです。大祭司とは公の社会的指導者です。その大祭司のいわばお墨付きをもらうことによって彼のしていることは「**正しい裁き**」ということになります。牢に入れるということはそういうことですね。自分の行動は社会的に正しい。だから彼は胸を張り、「意気込んで」主の弟子たち、教会に生きる者たちを迫害しました。

私たちは幼な子の時はいざ知らず、成長すると心の中で「**裁く**」ことを覚えると思います。裁くというのは、**一つの基準・ものさし**を持つということですね。それが社会の秩序・規範だと言われるし、そのものさしに適っていれば私は正常であることを保つことができる。ですから、テロ行為は許されない、というものさしもあれば、同じ破壊行為（殺人行為）でも戦争は、国家のお墨付きを得て合法化されます。この矛盾を、皮肉とユーモアを持って描いたのがチャップリンの『殺人狂時代』です。人間は、社会的ものさし、或いは自分自身のものさしに翻弄されるのです。それは時に「**刀**」です。その刀を用いて、他者を滅ぼしながら自分を生かす。自己を正当化する。残念ながらと言いますか、私たちがいつも心得ていなければならないことは**宗教の世界**ほど、このものさしが、人を排除し、叩く、神様の權威を帯びる、絶望的な力になってしまうことがあるということです。

サウロは恐らく全く悪気はないのです。とんでもない異端の芽は早く摘まなければならない。自分は**神のみこころの代理**としてこのイエスをメシアと信じる扇動者たちを叩くのだと大真面目に思っていたでしょう。このあたりは良く考えたいと思います。「人を裁く」ということ。それはある種の快感を与えるのですね。サタンの巧妙さがあると思うのです。それは「私のものさしは正しい。私は神のみこころの代理をしている」という、宗教的な絶対主義と殆ど同じではないでしょうか。これは全ての人を持っているのです。私も持っています。**自分が裁き主になる**のです。自分が神様になると言ってもよいことだと思います。

サウロがダマスコの会堂に馬を走らせていく、つまり自己絶対化をエスカレートさせて行くその途上で、彼は天からの光に打たれて多分落馬し、歩けなくなってしまう。そして盲目になりました。神様は、彼をここでつぶす、殺すということも出来た筈ですがそうはなさいませんでした。5-6節。「**主よ、あなたはどなたですか**」と言うと、**答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」**。一滅ぼすどころか、主は「**起きよ。そして町へ入れ**」と、彼に**新しい人生の生き方**を与えようとするのですね。外ならぬ**主イエス**が彼に語りかけられたのです。主はきっとサウロの心に語りかけられたのだと思います。「今までの、人を裁く人生は空しくなかったか。そんなことであなたがあなたであることの証しになって良いのか？ 裁くことがあなたの誇りになり得るか？」と。ここに既にあるのは、「赦し」です。主を迫害するその者に対して、断罪するのではなく、赦すのです。これと真逆なのが「自己責任論」ではないでしょうか？…10節以下で**アナニア**という弟子が登場し、彼はサウロの手引きをする役割を与えられるのですが、主はアナニアに、サウロについてこう語っています。—「**今、彼は祈っている**」(9:11)。

[3] ステファノの祈り、主イエスの十字架の祈り

この祈りの中で彼の中に何が起こったのか書いてはありません。しかし、三日間、彼は立ち止まって祈りました。祈りとは、神様に心を開くことですね。その中で彼の心の中には一つの祈りの声が鮮やかに聞こえて来たのではないかと思います。それは、彼が殺害に賛同していた**ステファノ**の最期の執り成しの祈りです。—「**主よ、この罪を彼らに負わせないでください**」(7:60)。そして、この祈りは、**イエス様の十字架上の祈りの言葉**と同じです。—「**父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです**」(ルカ 23:34)。ある学者は、ルカによる福音書だけにこの祈りの言葉が記録されているのは、もしかしたらパウロ自身がその祈りの声を聴いていたことを後になって伝えたからではないかと推理します。有り得ることです。この祈りはこれ迄の彼の生き方からは決して出てこない決

定的な言葉なのです。裁くことこそ神様の御心だ。そうやって神様の義は、権威は保たれるし、私の生き方も正しいとされる。…しかし、主イエスは、それとは全く反対のことを、十字架の死によって示されたのです。

[4] 十字架から目を逸らさずに生きていく

先ほど、サウロは神様に殺されませんでしたと言いました。神様は「裁き」をしなかったわけではないのです。裁きを、裁かれてしかるべきサウロに対しては行使せず、主イエスに対して行ったのですね。全く理屈に合わないことですね。けれども、全く理屈に合わないから「愛」なのです。主イエスによって示された神は「裁き」ではなく、「愛」と「赦し」の神様です。甘っちょろいでしょうか？ 甘くないです。人を裁くことをやめ、そのものさしを捨てることです。ただ十字架の愛を持って人を見、また自分を見る。これは大きな生き方の変革です。

パウロは、後にコリントの教会宛の手紙の中でこのように書き記しました。「あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい」(コリントの信徒への手紙一 6:19-20)。私の愛唱聖句の一つです。

私たちは、神様に代価を払って買い取られた存在だと言うのです。清算済みなのです。私の有罪を、主が身代わりになって下さったので、私の服役は終わったのです。でも、宙ぶらりんになったのではありません。新しい服役が始まりました。神様のものとして生きるという幸いな服役です。

私は思うのですが、私たちは皆、死刑宣告の有罪が主イエスの肩代わりによって解かれ、牢からも出され、自由にされた罪人だと思います。そのためには途方もない代価が支払われたのです。イエス様のお苦しみと、十字架の血汐という代価です。私たちが生きているということは、主ご自身にこの愛の負債を返し続けて行くということではないでしょうか？ パウロは「私たちの主イエス・キリストの十字架の他に誇るものが決してあってはなりません」と言いました。私たちはこの十字架から目を逸らさずに生きていくことが人生の目的、理由です。私たちの「なすべきこと」(6 節)とはこの事ではないかと思いました。赦された者として、主ご自身を私の誇りとして生きていきたいと思えます。使徒言行録 9 章でサウロに起こったことは、私たち一人ひとりに起こっていることと全く同じことです。聖霊は、私たちに本当の自由を与えてくれます。その聖霊の祝福が皆さんお一人ひとりにありますようにお祈りしています。

お祈り致します。